

「文化」の現場を歩く

第4回

人材・施設・手法

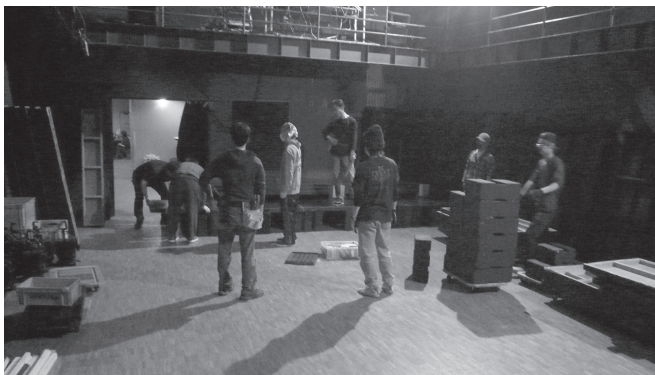
静岡文化芸術大学教授

松本 茂章

東京・北区の民間シアター「王子小劇場」

◆巨漢のサンタさん

身長1・85メートル、体重100キロ超。東京・北区のJR王子駅前を南北に走る国道122号線沿いの商店街に大柄サンタクロースが現れた。2015年12月24日の午後のこと。サンタは集まってきた子供たちにチョコレートを優しく手渡していった。地元商店街による歳末売り出しの一環でスタンプラリーが実施され、一定の数を集めるとお菓子がプレゼントされる。サンタ役を務めたのは北川



王子小劇場の内部。地下にこんな芸術空間があるとは…。国道に面した地上の出入口からは分からない

審査制を採用したのは、尖った表現をする劇団を見つけて優先的に使ってもらい、世に問いたいと願ったからだ。ただの貸し館にしなかつた。たとえば早稲田の学生らで結成した「ポッドール」は2001年に同劇場で初上演をしたのち常連に。主宰の三浦大輔が演劇界の芥

大輔(1985年生まれ)。「この体ですから『適任者』と依頼され、無償ボランティアでお引き受けした。商店街にはお世話になってるので」と笑顔で話した。北川は、同通に面した民間の王子小劇場で芸術監督を務めており、劇場主催の落語会に対して商店街の協賛を得ている。地元のお付き合いは大切に、というわけだ。王子小劇場は1998年7月に開館した。10階建てビルの地下1階に設けられており、階段を降りていくと、広さ70平方メートル、高さ5メートルの劇場スペースがある。木製床のフラットな「平土間づくり」である。仮設の客席を10ほど設けることが可能だ。

◆民間設立の劇場

同ビルは、電設資材卸の佐藤電機(1933年創業)が所有する旧本社及びアイロン製造工場跡である。10階建てのビルを新築するにあたり、1階は電化製品売り場、2階は起業を目指す若手の支援施設、3〜10階は住居とした。小劇場は地下1階に配置した。社長の佐藤行雄(1944年生まれ)は「かつて王子は工場

川賞である岸田國士賞を受賞した。「演劇人の青田買い劇場」と新聞に評された。若手支援のために劇場使用料を最安値で1週間39万円などと抑え目に設定する。さらに演劇賞を設けたり、ユース演劇祭を開いたり……。中高生のサマースクールにも取り組む。

◆ユニークな芸術監督

開館以来、長いあご髭姿の玉山悟(1974年生まれ)が劇場代表を務めた。劇団の役者を経て20代前半で社長の佐藤と知り合い、運営役に請われた。2010年には芸術監督に就任。劇場の基盤を築いた。しかし若手支援の趣旨を踏まえて「芸術監督も若くなくては」と40歳定年制を自ら言い出し、範を示して2014年に退職。2代目として巨漢の北川が継いだ。

北川は鹿児島県生まれ。鹿児島ラ・サール高校を卒業。東京大学文科一類に入学後に演劇に目覚め、劇団綺崎に入団し

地帯で、若い人たちでにぎわっていた。近年寂しくなったので人通りを増やしたかった」と話す。商店街組合振興会の理事(現在は理事長)として地元振興を目指した。区議や議長を務めた創業者の父が戦争直後、「子どもたちに礼儀作法を教えたい」と柔道場を設置して地域住民に開放したように、同社には地域貢献活動の伝統があるからだ。2008年には企業メセナ協議会のメセナアワードを受賞した。

劇場の特色は主に三つある。一つには職員9人全員が劇団関係者であること。二つに使用希望劇団の公演を原則としてすべて審査すること。三つ目には若手劇団の育成に徹してきたこと。芸術監督の北川自身、劇団「カムキヤッセン」主宰者で作・演出を手がける。8月末まで職員だった、つくにうらら(1991年生まれ)も劇団「カミグセ」主宰者だ。彼女は「同世代の演劇人はライバルなのでお金や契約のことなどは聞きづらい。その点ここでは同僚同士で率直に相談しあえる。情報は利用する若手劇団にも伝わる利点がある」と率直に話した。

た。大学構内に設けられた駒場小空間という平土間で活動を展開した。劇団夢の遊眠社(野田秀樹主宰)が公演した駒場寮の跡地で、廃寮後に新しく設置されたスペースである。同空間は学生主導で運営されてきた。北川は3年生からはディレクター職(正式名称は多目的ホール総務部議長)に就任。4年間、同空間の運営を切り盛りした。「場の管理という仕事に魅せられた。人が集まる真ん中で働けることが幸せと感じた。人々を出会わせる試みが楽しくなった」と振り返る。とはいえ、勉強が疎かになり、2011年に教養学部地域文化学科を中退。翌年、職員公募に応じて王子小劇場に採用された。

芸術監督は芸術表現に加えて財務の面倒も見る。北川によると同劇場の支出は年間2500万円。収入が少ない年では2000万円、多くても2300万円。数百万円の赤字体質である。黒字になったのは開館以来一度だけ。稼働率はほぼ100%だが、使用する若手劇団の支払

「演劇のまち」を目指した取り組み

い能力を考えると、使用料値上げは無理。このため職員人件費の20%を削った。外部の寄付を求めた。親会社の理解で赤字を補ってほしいながらも、劇場命名権の販売を図った。

◆演劇を巡る官と民の連携

同劇場が2011年に中高生向けのサマースクールを始めた際、国道を挟んで100メートル先にある北区文化振興

財団に生徒募集協力を求めた。以来、劇場と財団の交流が本格化した。財団事業係主査の武藤洋（1969年生まれ）は「至近距離ながら官と民の心理的距離は決して近くなかった」と振り返る。武藤は早稲田大学卒業後、パリに3年間留学してパリ第3大学の演劇研究所で学んだ経験を持つ。静岡県舞台芸術センター（SPAC）制作部に勤務していた経験もあっただけに、演劇を愛する心が動かされた。「一緒に何かやりたい」と感じた。

王子小劇場が主催した2014年の演劇祭で、武藤は区立施設を会場に加える案に協力、上司に諮って使用を認めてもらった。同年、同劇場で北川作・演出

の作品「未開の議場」を見て感激。「北区で育てて全国ツアーに出したい」と決意した。外国人住民が地元祭礼に参加するのを認めるかを話し合う異例の議論劇だ。2016年に実行委員会を結成し出演者を公募。区立文化・産業施設である北とびあ内に設けられたベガサスホールで8月26日から9月4日まで上演した。市民参加型としては異例の12公演ながら客席は80%ほど入った。

北川によると、応募35人のうち12人を選んだ。65歳以上が4人含まれていた。北区の高齢化率は東京23区のなかで最高で、人口約32万人のうち65歳以上が25.4%を占める（2015年1月現在）。北川や武藤は「シニアの方々に演劇の魅力を伝えたい」と願う一方で、「若い演劇関係者が集まってくることによって北区の可能性が広がる」とも期待する。

王子界限には計九つの演劇関連施設が集中する。同劇場に加えて80メートル北側の稽古場「王子スタジオNo1」の民間二つ、さらに北とびあ内の大小6ホール、旧中学校校舎を活用した区立稽古場の行政七つである。（演劇のまち）とい

えば世田谷区・下北沢が知られるが、王子が新たに名乗りを挙げた。東京一極集中の弊害が叫ばれるけれど、都心部と外縁部に文化的落差があるのも事実。都心でない北区の意欲的な取り組みに注目したい。（敬称略）

* * *

リオデジャネイロ五輪閉幕式の8月22日（日本時間）。次の東京大会（2020年）に向けたフラッグ・ハングオーバー・セレモニーが行われた。五輪旗が着物姿の都知事に渡され、大きく振られた直後、会場に日本の若者たちが飛び出してきて、映像あり、ダンスあり、音楽ありの素敵なショーを披露した。東京五輪・パラリンピックが近づいてきたことを実感した。同大会までの4年間、日本各地で「文化プログラム」が練り広げられる。文化庁は「20万件」を目標に掲げた基本構想を公表し、自治体も準備を始めた。実現のためには官と民の連携が必要だ。資金調達に加え、企画や実施のさまざまな人材の養成、場の確保が欠かせない。そう思うとき、各地の取り組みを紹介していく本連載の重要性をかみしめた。